

氏	名	BJOERK, Tove Johanna
学 位 の 種 類		博士 (文学)
報 告 番 号		甲第366号
学 位 授 与 年 月 日		2014年 3月31日
学 位 授 与 の 要 件		学位規則 (昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目		「享保期における江戸の歌舞伎一二代目市川団十郎を中心に」
審 査 委 員		(主査) 水谷 隆之 加藤 睦 加藤 敦子 (都留文科大学文学部准教授)

## I 論文内容の要旨

論文名…享保期における江戸の歌舞伎—二代目市川団十郎を中心に

### (1) 論文構成

はじめに

#### 第一部 享保期歌舞伎の環境

##### 第1章 享保十九年の江戸歌舞伎——二代目市川団十郎と劇場経営——

###### 第1節 享保期歌舞伎の経済構造

###### 第2節 興行における二代目団十郎の役割

##### 第2章 森田座の休座と河原崎座旗揚げ——二代目団十郎の関与——

###### 第1節 木挽町の地主たちと森田座

###### 第2節 控櫓の交渉と二代目団十郎

##### 第3章 享保期の芝居茶屋と観客——二代目団十郎との関係——

###### 第1節 芝居茶屋と観客

###### 第2節 二代目団十郎と葺屋町の茶屋と観客

#### 第二部 享保期歌舞伎の演出の種々相

##### 第4章 二代目団十郎と江戸の開帳興行——不動明王の演出を中心に——

###### 第1節 二代目団十郎と不動信仰

###### 第2節 元禄歌舞伎における不動信仰と演出

###### 第3節 二代目団十郎における開帳興行の演出

###### 第4節 不動明王の演技の固定化

##### 第5章 二代目団十郎の宣伝と演出——もぐさ売りやせりふ正本を中心に——

###### 第1節 もぐさ売りの初演まで

###### 第2節 もぐさ売りから他の物売りの宣伝へ

###### 第3節 せりふ正本に対する二代目団十郎の関与

##### 第6章 享保期歌舞伎における喫煙の演出——二代目団十郎演じる助六を中心に——

###### 第1節 煙草の由来

###### 第2節 煙草文化の登場

###### 第3節 歌舞伎における喫煙場面

###### 第4節 二代目団十郎の喫煙と助六

###### 第5節 江戸後期〈助六〉の煙草趣向

おわりに

【日記の登場人物一覧】 あ〜わ順、【参考資料一覧】 種類別にあ〜わ順

### (1) 論文の内容要旨

本論文では、守屋毅氏が提唱する演劇研究への歴史的アプローチを用い、享保期の歌舞伎役者である二代目市川団十郎(1688-1758)の日記を分析し、団十郎の活躍について多角的に考察する。

第一部(第1～3章)では享保期の劇場がどのように経営され、いかにして近代まで運営を継続することができたか、歌舞伎興行は誰の役に立ったかといった、劇場をとりまく環境を明らかにする。第二部〈役者の演出〉(第4～6章)では、享保期江戸歌舞伎における演出の実態と、二代目団十郎の演出が好評を博した理由について考察する。

第一部第1章「享保十九年の江戸歌舞伎——二代目市川団十郎と劇場経営——」では、享保19年の市川座の興行を中心に、歌舞伎劇場の支出の問題や金主の役割について論じ、さらに座頭として勤めていた二代目団十郎の経営上の役割を明らかにする。第2章「森田座の休座と河原崎座旗揚げ——二代目団十郎の関与——」では、享保19年8月に借金が原因で森田座が休座となり、翌年から河原崎座が控櫓として営業許可を得た経緯を明らかにする。第3章「享保期の芝居茶屋と観客——二代目団十郎との関係——」では、歌舞伎の客層ならびに劇場から多大な利益を得ていた周辺の芝居茶屋の客層の変遷を示したうえで、二代目団十郎と芝居茶屋・茶屋客との関係について考察する。

第二部(第4～6章)では、第一部で明らかにした団十郎および歌舞伎をとりまく環境の実態を踏まえ、二代目団十郎の演出がいかにして発展したかについて吟味する。元禄期から享保期における歌舞伎の演出の変化を明らかにし、近世後期に固定化される歌舞伎の性質との共通性を示し、享保期の歌舞伎を以後の歌舞伎の原点と位置付けるものである。

第4章「二代目団十郎と江戸の開帳興行——不動明王の演出を中心に——」では、江戸の町を賑わせた諸寺院の開帳が、後に市川家の十八番として定着する不動明王の演技をもたらした経緯について論じる。第5章「二代目団十郎の宣伝と演出——もぐさ売りやせりふ正本を中心に——」では、宝永6年7月、初代団十郎の追善として山村座で上演され、二代目団十郎の出世役となった「傾城雲雀山」におけるもぐさ売りのやつし芸の実際と、それに関わる宣伝活動や出版物制作への団十郎の関与について明らかにする。第6章「享保期歌舞伎における喫煙の演出——二代目団十郎演じる助六を中心に——」では、助六の場面に用いられた煙草と、当時の社会に浸透していた喫煙文化との関わりを考察する。

以上、本研究では、二代目団十郎の日記を〈劇場の環境〉と〈役者の演出〉の二面から分析することにより、江戸初期から享保期に至るまでの劇場の経営状況や茶屋の関係、観客層、演出の変遷を通時的に明らかにし、いずれも延宝や元禄、享保期に大きな変化が生じていることを明らかにした。江戸の都市化や発達する市場経済、消費文化の性質の変化と歌舞伎の密接な関係を示し、江戸歌舞伎の社会的意義や看板役者の役割について考察した。

## II 審査結果の要旨

本論文は、享保期江戸歌舞伎の中心的役者であった二代目市川団十郎（1688-1758）に焦点をあて、当時の劇場環境の実態を示し、役者の演出について論じたものである。

第一部「享保期歌舞伎の環境」は、享保期の劇場の経済構造（第1章）、控櫓の成立の経緯（第2章）、芝居茶屋と観客の関係（第3章）について明らかにする。いずれも江戸初期から享保期に至るまでの劇場の変遷を通史的に捉えたうえで、現存する資料を博捜し、劇場の変遷と経営の実際を実証的に論じている。また、二代目団十郎の日記を軸に、団十郎の芝居経営のさまを検証し、上記の分析に役立てている。劇場の観客収容数や森田座の借金の原因についてなど、細部にわたっては今後さらなる調査が必要であるが、これまで十分な検証がなされてこなかった控櫓（都座・桐座・河原崎座）の営業許可の経緯など、本論文によって明らかにされた事実は数多い。

第二部「享保期歌舞伎の演出の種々相」は、享保期の江戸歌舞伎の演出について、二代目団十郎の特徴を示しつつ論じた研究である。第4章では、団十郎と寺社関係者との交渉の経緯を追ったうえで、開帳興行を取り上げた団十郎の不動明王の演出について論じている。第5章では、二代目団十郎の出世役であったもぐさ売りのやつし芸について考察するとともに、その人気は劇場のみならず実際の商人にも利益をもたらしたこと、せりふ正本の制作・出版への団十郎の関わりについて言及する。第6章では、二代目団十郎が創案した「助六」の場面について、特に近世初期にもたらされた煙草文化の実態と、それを舞台に用いた団十郎の工夫を示し、それが後に固定化していく様相を論じている。歌舞伎の演出を取り上げるうえでは、観客の当たりを狙う役者の工夫の方向性など、作品や資料に基づいた内容分析が今後の課題となるが、以上の論はいずれも、二代目団十郎の日記を詳細に分析しつつ興行に至る過程を追うとともに、もぐさ売りや煙草売りといった江戸の風俗を把握し、それを舞台に導入した団十郎の様式的な工夫を具体的に明らかにしたものである。こうした視座からの団十郎研究はこれまでに少なく、その意義は大きい。

江戸初期から元禄末にかけて、そして寛政文化期以降についての歌舞伎研究は従来多くなされてきたが、その転換期にあたる享保期の資料は極めて少なく、未詳の部分が多く残されていた。本論文は、研究史において空白期間であった享保期の江戸歌舞伎の興行の実態を、同じく十分な検討がなされていなかった二代目団十郎を軸に、広い視野のもとで資料を博捜し明らかにした点に画期的な意義がある。本論文が、享保期の歌舞伎を論ずるうえで今後参照すべき基本文献となることは疑いなく、高く評価できるものである。